

## カリキュラム及びシラバスにおける注目すべき事例について

大学	【個別分析表】No.	コメント
1	3	<p>「コミュニケーション能力」に関する科目を、「スキル」の4単位選択必修科目のうち2単位×7科目設置している。</p> <p>科目名：書写</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>国語・漢字検定1</li> <li>国語・漢字検定2</li> <li>オーラル・コミュニケーション(きく)</li> <li>オーラル・コミュニケーション(話す)</li> <li>言語表現A</li> <li>言語表現B</li> </ul>
2	6	<p>多くの大学(学部)が、昨今の社会状況やニーズ、学生の就職先等を鑑み、日本語教員養成課程も多様化への対応を図ろうとしている中、そのことを念頭においてカリキュラムなどに反映しつつも、これまでの修了生の就職先の大半が、国内外の大学、研究機関等を中心とする日本語教育関連分野であるという実績や、学内外の期待を受けて、「応用実践力」を備えた、広義の日本語教育学分野(言語教育学分野)の「先端的研究者の養成」に力を入れている点が、特徴的である。</p> <p>「社会・文化・地域」、「言語と社会」、「言語と心理」、「言語と教育」、「言語」の5区分をカバーする科目を開講するとともに、狭義の日本語教育学にかかわる「教育実習」、「日本語教授法」を必修としている他に、2010年度より「言語教育学研究方法論」を必修科目として追加し、基礎的研究能力の充実を義務づけている点が特徴的である。</p> <p>また、一方で、「日本語教育学臨地研究」「日本語教育学臨地実習」という科目を設け、あらかじめ設計された形の「教育実習」とは別に、学生自らの「研究・実践企画遂行能力」の促進を図るため、学生が自らが、研究、或いは、教育実践の研修を企画して教員の承認を得た上で、本学が連携している海外の約15の大学の担当者と連絡をとり、2～4週間のフィールドを体験するという科目も設けている(インターンシップのような形から、施設見学、先方の教員の授業や教材作成の補助、模擬実習、修士論文にかかわるフィールド調査等々、多岐にわたる企画を推奨している。)期間が短い分、1単位しか与えないが、主に、夏休みか春休みを活用する形にして、休学して修了が遅れることがない形にしてある。</p> <p>研究方法論の必修化によって、「基礎研究能力」を固めるとともに、臨地実習などを通して、自律的研究遂行能力を強化し、「応用実践力」を養うことによって、将来、この分野において指導的役割を果たすことのできる人材育成を目指している点は、特徴的と考えられるのではないかと。</p>
3	7	<p>「コミュニケーション能力」に関する科目を、「専攻語学」必修科目として1単位×8科目、「実践日本語コース」必修科目として2単位×5科目設置している。</p> <p>科目名：</p> <p>(専攻語学)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日本語A-1(口頭表現)</li> <li>日本語A-2(口頭表現)</li> <li>日本語B-1(文章表現)</li> <li>日本語B-2(文章表現)</li> <li>日本語A-3(弁論・討論)</li> <li>日本語A-4(弁論・討論)</li> <li>日本語B-3(執筆・推敲)</li> <li>日本語B-4(執筆・推敲)</li> </ul> <p>(実践日本語コース)</p> <p>スピーチ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>説明・提案</li> <li>創作</li> <li>提示・発表1</li> <li>提示・発表2</li> </ul>

4	8	「コミュニケーション能力」に関する科目を、【前期】外国語科目(選択)4~12単位以上として2単位×4科目設置している。 科目名:日本語コミュニケーション1(スピーチライティング) 日本語コミュニケーション2(スピーチライティング) 日本語コミュニケーション3(掲示・発表) 日本語コミュニケーション4(掲示・発表)
5	11	課程修了に必要な単位数が、通常設定される単位数(30)よりも多い単位数(36)になっている。習得すべき単位に必修・選択必修の区別をつけない。修了条件に審査合格を含むことなど、他の研究科のプログラムとは一味違う試みだと思えます。  (特記事項)教育実習先に海外機関を含むことも注目に値する。
6	20	特定の専攻に限定せず、全学の学生が履修することができるように設定されている。
7	23	特定の専攻に限定せず、全学の学生が履修することができるように設定されている。
8	27	この大学のカリキュラムは、日本語教育を学校教育の中の一つのコースとして設定し、同じ教育学研究科の文化や心理の研究者と協力して課程を運営している点に特徴がある。 課程名も「日本語教育支援」となっていて、従来の学校教育課程の中に位置づけしやすくなっている。 ただ、この課程を企画立案した教授が来年3月でやめるようで、新しい日本語教育関係の教授人事が大学のサイトに出ているのが気になる。運営の方針が変更しないことを期待する。
9	30	小中学校の教員養成課程に日本語教育を学べる講座を作ったことが特徴。 この大学は、国語教育と日本語教育の課程が同じ一つの講座に所属しているという他の大学に見られない講座となっている。 日本語教育の研究者も2名いて、学生の多様な要望に対応できる。
10	( )	小中学校の教員養成課程に日本語教育を学べるコースを作ったことが特徴。 日本語教育の研究者も2名いて、教材開発なども学べる課程になっている。 文科省のJSLカリキュラム推進の中心的な役割を果たしている。
11	25	社会・文化(教育制度・教育史・国際関係などを含む)に関する素養を重視し、そのような領域に関する授業科目や授業内容を厚く配置している点に注目
12	27	「カリキュラムの特色」として「広い領域をカバーする研究科は他に類を見ないこと」「グローバルな視野に立ち複数文化への理解を基に日本語支援教育を行うこと」を強調しており、言語文化、言語習得、国際文化、文化共生などの授業が多くある点に注目したが、同時に言語学関係の科目がどのように組み込まれているかにも注目。
13	31	教員養成のいわゆる5領域のすべてに渡って、かなり細かい科目群を準備しており(特にB群、別表<日本事情>科目群)、包括的なプログラムになっている可能性に注目。また、「日本語教員養成プログラム」の<理念>の1や2の内容に、研究・教育機関としての大学における教員養成の在り方・水準を標榜しているように思える点に着目。
日 振 り	【個別分 析表】No.	コメント
14	33	修了に必要な時間数が800時間となっている。卒業試験が課されている。修了要件に履修科目の成績評価の下限が設けられている。
15	35	この日本語教師養成講座の履修時間は420時間であり、他の長期養成講座と同じであるが、特徴は、これを3か月という短期間の学習期間で実施しているところにある。 一般的には、長期講座の学習機関は、6か月から1年で実施されている。 最近、本件のように3か月の学習期間で実施するところがあるのである。 この3か月の学習期間では、1日7~8時間の授業が必要となり、効果の点からも疑問があるとの意見も出されており、その妥当性について公の機関で検証する必要がある。

16	43	<p>コース設定について、他と比較して非常に多岐に及んでいることが特徴的である。受講者の便宜に応え、「レギュラーコース、ゆったりコース、短期集中コース、あるいは週2～3日受講を可能とする自由選択コース、演習、実習コース」と期間、内容両面で様々なコースを提供している。</p> <p>(特記事項) 開講日程は講座によって様々であるが、420時間シラバスを非常に短期で修了するケース、長期におよぶケース等、開講日程と教育内容の合理性を考える上でコース設定の実態をみる必要もあると思われる。</p>
17	43	<p>この日本語教師養成講座の履修時間は420時間であり、他の長期養成講座と同じであるが、特徴は、これを3か月という短期間の学習期間で実施しているところにある。</p> <p>一般的には、長期講座の学習機関は、6か月から1年で実施されている。</p> <p>最近、本件のように3か月の学習期間で実施するところがでている。</p> <p>この3か月の学習期間では、1日7～8時間の授業が必要となり、効果の点からも疑問があるとの意見も出されており、その妥当性について公の機関で検証する必要がある。</p>
18	44	<p>この日本語教師養成講座の履修時間は420時間であり、他の長期養成講座と同じであるが、特徴は、これを3か月という短期間の学習期間で実施しているところにある。</p> <p>一般的には、長期講座の学習機関は、6か月から1年で実施されている。</p> <p>最近、本件のように3か月の学習期間で実施するところがでている。</p> <p>この3か月の学習期間では、1日7～8時間の授業が必要となり、効果の点からも疑問があるとの意見も出されており、その妥当性について公の機関で検証する必要がある。</p>
19	46	<p>コミュニケーション教育を重視し、特に非言語コミュニケーションのトレーニングをプログラムに編成している点が他と比較して特徴的である。</p> <p>具体的には、現役の俳優を招き、視線、表情、身振り、声などの非言語コミュニケーションを習得するユニットを独立して設定している。</p> <p>(特記事項) 日本語教師自身の伝達能力、コミュニケーション能力は重要な資質、能力だが、養成課程において取り上げられている事例は少ない。</p> <p>教師に求められる資質として、人間性、コミュニケーション力は詠われているが、トレーニングによってその資質を育成するプランは積極的に示されていない。当該講座の試みはこれからの教師養成のヒントになるのではないか。</p>
20	48	<p>ディスカッション、ワークショップ、を軸にプログラムを組み立てている点に注目。</p>
21	( )	<p>教育内容において、教師自身の日本語力向上を目指す演習を取り入れている点に特徴を見ることが出来る。</p> <p>演習項目に、「日本文学、日本事情等の読解、視聴」、「意見を述べる、討論する、論理的に文章を書く、インタビュー、報告書の作成」などの項目を設置し、教師の日本語運用能力の育成を積極的に諮る姿勢が見られる。</p> <p>(特記事項) 一般的に講座内容としては、「必要な専門知識、教授法」に関わる事項に終始する例が多く、教師の日本語運用力に及んでいないのが実態と思われる。</p> <p>しかし教師の日本語力の問題は重要で、これからの養成・育成プログラムの教育内容として欠かせないものとする。</p>

22	( )	記述内容から見て、日本語非母語話者のための日本語教員養成プログラムだと思われる点に注目。また、「日本文化論」「その他(日本留学ならではの体験)」の項目の立て方がどのようにステレオタイプ化を免れているかに着目。
地域	【個別分析表】No.	コメント
23	53	コーディネーターの重要性を認めて独立した研修としている。
24	54③	コーディネーターの重要性を認めて独立した研修としている。
25	63	二つの講座ともに、年少者教育に特化した教員の素養育成を短時間で目指している点に注目。
26	63①	<p>コメント 日本語を母語としない外国人年少者に対する日本語教育は彼等の母語が何語であるかと言うことを念頭に置かねばならない。通常は学習者の母語は多様化しているため、どの外国語も使用することが出来ず、日本語で教える直接法が採用されるが、標記の講座の場合、「英語を理解できる子ども」と言う事に限定している所に特徴がある。</p> <p>(特記事項) 地域の日本語教育現場でも、年少者を持つ親から、英語で教えて欲しいと要望されることがある。インターナショナルスクールでは、教育は英語で行われる。このようなケースに対応出来るようAJALTでは英語圏の年少者向きのテキストを著作・出版している。地域日本語教室で英語で書かれた教材を使用する例はほとんどないが、上記のように同様の条件の人が日本語教室に来る場合も皆無ではない。</p>
27	63②	<p>(特記事項) 外国人児童・生徒が「公立の小・中学校の授業に早くついていくため特訓をして欲しい」または「宿題を教えて欲しい」と、地域の日本語教室に来る例が多い。この様な子ども達に対応するための日本語教育も、地域日本語教室では後発の課題の一つである。当初ボランティアで日本語を教えようとする支援者達は成人を対象としていて、児童・生徒の日本語学習は学校で学校の先生が行うものだと思われていたので、特別にこのような子ども達に対応出来るボランティアを備えている地域は少ない。また、仮に対応出来ても、それはその日の宿題の答を一緒に考えたり、教えたりすることに終わり、各教科についていくための日本語教育ができる人は殆どいない。このために、標記のような講座を求められ、これに応えられる教師グループをAJALTは内部で養成してきた。初等・中等教育の教師から日本語教育の専門家になる者は少ないが、日本語教師が各学年の教科に対応出来るよう研究し、「かんじだいすきシリーズ」の一環として、教科対応教材開発を進めている。以上</p>
28	64①	<p>外国人児童生徒の数が全国的にも最も多く、集住都市もあり、地域の日本語教育は先進県であるが、この講座はその中でも内容が突出している。</p> <p>(講座の特徴)</p> <p>特徴1 講座の目的が、学校の教員経験者に日本語教育の指導法を身につけ、地域における日本語教室の設立、運営を担うボランティア人材育成を目的としている。</p> <p>特徴2 学校の教員と地域のボランティア日本語教師の関係を図り、地元の児童・生徒の日本語学習の向上を狙う。</p> <p>特徴3 学校と地域と大学の協働により県内の外国人への日本語教育全体への効果を高める。</p> <p>特徴4 講座を担当する講師が、児童・生徒への日本語教育の研究者である大学教授、地域の日本語ボランティア経験豊かな講師、ボランティア団体や組織の代表者、県の担当職員等多彩であり、それぞれがベテランであることから、高度な関係効果が期待できる。</p> <p>特徴5 カリキュラムがそれらの講師による協力の下に進められ、グループワークによる指導法の学習、フィールドワークとして学校の日本語教室・地域の日本語教室の見学や、地域の日本語教室の事例報告など、多彩に組まれている。</p> <p>(特記事項)</p> <p>県、地域、大学、小学校等の多様な外国人受入組織・機関が、これだけ協力体制が取れるのは珍しい。すべての地域にこの水準の講座を望むのは無理としても、外国人の子どもを指導する日本語ボランティアが受ける講座の初頭に受ける講座のモデルと言える。</p> <p>ただし、これを終了してから、具体的なシラバス、第二言語教育の教授法「Can doを中心に」が、地域の学習者のニーズによって柔軟に組み立てられる力をつけなければならない。現場を観察し、地域の要望、学習者のニーズ分析等の実習が必要であり、各地域に求められる内容が付加されることにより、それぞれの地域の特性が加えられていく。</p>

29	66	<p>通常は、日本語が出来ない外国人に、日本人が学習支援をするのが地域日本語教育の形であるが、この地域は、既に日本語を習得した日系外国人が、まだ日本語が未熟な同胞を支援するために企画され、研修を受ける機会を提供する養成講座である。</p> <p>コースを担当する講師は、主催法人の講師、愛知県立大、愛知淑徳大の講師等を中心に、すでに日本語を習得している日系外国人たちが協力する。講座応募もポルトガル語で受け付けることができ、講座の案内に「母国の人に日本語を教えよう！」とのキャッチフレーズがある。毎週土曜日2時間ずつ。参加費が無料であることも特記事項である。</p> <p>講座のコース内容は、基礎コースと実践コースがあり、基礎コースは「日本語とは」「日本語学習に於ける文法」「日本語の発音」「文字・語彙」「話すことを教える」「読むことを教える」「日本人の言語表現」「異文化コミュニケーション」「日本語ボランティアについて」</p> <p>実践コースは「日本語の特色」「日本語教育文法」「日本語の発音」「文字指導」「会話指導」「生活日本語指導」「読解指導」「異文化社会とコミュニケーション」「外国人の子どもの教育環境課題」であり、地域の日本語学習支援者養成の中で、例外的存在である。</p> <p>(特記事項)</p> <p>この市は〇〇県の中でも△△市のベッドタウンであると同時に、周辺にも自動車工場、部品工場が集結。また、縫製工場も多い。人口は圧倒的に期間労働者が多く、日系人の集住都市としても屈指の地域である。したがって日本の産業の動静による影響が強く、一時は生産人口が激増し、公立小・中校に通う日系人児童・生徒増加したことも知られるが、2009年からの景気低迷を受け、現在は減少の傾向が顕著であり、市政にも影響を与えている。</p> <p>その中において日系人社会の問題は常に変動のある地域であるが、この講座に見られるような同胞支援の運動も各所に見られ、日本の共生社会のモデルとしても、さまざまな施策が行われている。現代の政治・経済情勢から見て、今後もその影響をまともに受ける地域として、日系人問題、労働者の格差の問題、共生社会作り、日本語の分からぬ児童・生徒の学習支援、日本語教育、母語教育、継承言語等の言語に関わる課題についても、注目すべき課題を抱えている。</p>
30	69	<p>ブラッシュアップ講座として、7講座用意されているが、それぞれユニークな内要になっており、7講座全体として特徴のあるブラッシュアップ講座になっている点に注目。</p>
31		<p>資料には全体としていくつかの特徴がありました。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 内容が詳細にわかる資料が少なかった。多くは参加者募集チラシのため日時・会場・講師・簡単な内容(タイトルと趣旨等)の情報であった。</li> <li>② 外国につながる子どもの日本語学習指導を目的としたボランティアの養成講座を内容とするものが多かった。子ども対象ということで特徴的ともいえるかもしれません。</li> <li>③ 内容的に日本語学習を必要としている人たちの背景理解や実際の取組みに関する活動報告や実践事例等を学ぶといった趣旨が目立った。</li> </ol>